

野村正起

沖縄戦敗兵日記

玉砕戦一等兵の手記

ついに最後の戦場にえらばれた沖縄。休むいとまもない
米軍の艦砲射撃、あいつぐ空襲と機銃掃射、おしよせる
戦車群と地獄さながらの火炎放射。全滅——玉砕を目前

シリーズ●戦争の証言⑩

太平出版社

野村正起

沖繩戦敗兵日記

玉碎戦一等兵の手記

筆者紹介

野村 正起 せいしき 1922年高知県に生まれる。高等小
学校卒。1942年12月高知歩兵第144連隊に入営、のち
1944年6月和歌山船舶工兵第26連隊に転属。同年8月
沖縄に派遣される。1946年1月復員、1949年7月いら
い高知刑務所で看守勤務

沖縄戦敗兵日記

1974年10月15日 第1刷発行

¥1300

1979年6月15日 第4刷発行

著者

野村 正起

発行者 東京都千代田区神田神保町1-46

崔 容 徳

印刷者 東京都文京区後楽2-11-2

道野整版所

発行所 東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル

株式会社 太平出版社 ©

電話 03-295-3531(代表) 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかいたします

野村正起

沖縄戦敗兵日記

玉砕戦一等兵の手記

ついに最後の戦場にえらばれた沖縄。休むいとまもない
米軍の艦砲射撃、あいつぐ空襲と機銃掃射、おしよせる
戦車群と地獄さながらの火炎放射。全滅——玉砕を目前



シリーズ●戦争の証言(全20巻)完結

① 死の影に生きて 中学生動労
船員日記 1300

② 戦災孤児の記録 広島原爆の
手記 1300

③ ヒロシマ―絶後の記録 広島原爆の
手記 1300

④ 学童集団疎開 1300

⑤ 無名兵士の詩集 1300

⑥ 東京空襲下の150日 1300

⑦ 戦火に生きた父母たち 中学生の関
心書 1160

⑧ ひとすじに星は流れて 満州引揚げ
母の手記 1300

⑨ わか 妻と娘の戦
争体験 1300

⑩ 満州―修羅の群れ 満蒙開拓団
難民の記録 1300

⑪ 中国人強制連行の記録 花岡重典等
作を中心に 1300

⑫ 南京・広島・アウシュ
ヴィッツ 1300

⑬ 神と愛と戦争 キリスト者
の戦中日記 1300

⑭ ぼくら墨ぬり少国民 戦争と子ども
と教師 1300

⑮ 戦争の横顔 陸軍報道班
員の記録 1300

⑯ 沖繩戦敗兵日記 1300

⑰ 海軍特別警察隊 下級戦艦の
手記 1300

⑱ 16歳の兵器工場 野沢高次郎
労働者の日記 1300

⑲ ヒロシマの夜の病棟から 被爆者日記
抄 1300

⑳ 二九四五年―慟哭の満州 日本人孤児
からの手紙 1300

日本反戦詩集 1300

日本原爆詩集 1300

英訳原爆詩集・1 1500

The Songs of Hiroshima 1500

感動の
ロンゲセラー
ユニボギの日記 1300

感動の
ユニボギの日記 1300

シリーズ●戦争の証言 ⑬

太平出版社

野村正起

沖繩戦敗兵日記

玉碎戦一等兵の手記

原书空白

原书空白

原书空白

原书空白

原书空白

原书空白

原书空白

シリーズ・戦争の証言16

沖縄戦敗兵日記

野村正起

I	沖繩戰前夜——序にかえて	13
II	根 差 部——「優勢ナル敵主力ガ上陸ヲ開始セリ」	35
III	宮 城——あいつぐ出撃	72
IV	与 座 岳——日本軍壊滅す	105
V	与 那 原——アメリカ軍警戒線を突破	137
VI	喜 舍 場——右肩甲部に貫通銃創	159
VII	新 垣——アメリカ兵の来襲	179
VIII	首 里——一九四五年九月一四日投降	205
	あとがき	229

I 沖繩戦前夜——序にかえて

一九四四年（昭和一九）年八月五日の朝、沖繩本島那覇港内港に上陸した同島守備部隊の一部支隊は、その規模においてゆうに一個師団を上回る大部隊であった。

わたしは、このなかに混っていた海上特科隊——暁一六七四部隊（船舶工兵第二六連隊）の兵であったが、いまもおわたしの脳裡には、そのときの情景が髣髴とよみがえってくる。

この大部隊によって埋められた内港の岸壁には、大発動艇（大発）が蜚集していた。そして沖合には駆逐艦数隻と貨物船十余隻の船団が並び、空には数機の偵察機が旋回していた。

それが鮮明な空と草色の海をバックにした滴るような緑の樹木の点在する港の風景にマッチして、いかにも印象的であった。

わたしは、その時の感動をまだ忘れることができない。……門司を出てからの五日間。絶えず敵潜水艦と敵機の襲撃に脅かされてきたわれわれにとって、この沖繩本島への上陸は、文字どおり蘇生の思いがしたものである。

このとき上陸した暁部隊の兵員は、途中で奄美大島へ派遣された第三中隊を除く本部及び本部付通信小隊、材料小隊、第一・第二中隊の七百十余名であった。

部隊は、間もなく宿舎に向かって出発。四辺にひしめく他の部隊のなかをぬって、港の裏町に入

そこには、高い石垣の塀に囲まれた赤瓦葺きの家や、屋根の上に獅子を象った棟瓦のある家など、沖縄特有の家々が建ち並んでいた。

ゆきかう住民は、陽にやけたきつい顔立ちで、耳にする年寄りのことばはまったくわからず、なかなか、われわれは異国に來た思いにかられた。

だが、その裏町を抜けて那覇の町に入ると、さすがに本土の繁華街に変わらぬ建物も数多く見られた。しかし住民の姿は少なく、道路の両側一杯に、隊伍を整えた部隊が往來し、そのなかを兵士や荷物を満載した軍用トラックが砂ぼこりを巻き上げながら走っていた。

やがてわれわれの部隊は、那覇の町をよぎって、宿舎と定められた裏通りの天妃国民学校（小学校）に入っていた。

このわれわれの砲部隊は、それより約一か月半前の六月二三日に、沖縄島守備軍である第三二軍司令部直轄部隊として、和歌山の船舶工兵第九連隊補充隊において、新たに編成された部隊であった。わたしはそのとき、中支の鯨六八八四部隊（歩兵第二三六連隊）から転属してきた三年兵（一九四二年徴集の現役兵）の一等兵で、以後、無線通信兵として部隊本部付通信小隊に属していた。

三日めの昼下がりであった。わたしの属していた通信小隊の第二分隊と本部および材料小隊の各一個分隊を合わせた四十余名は、本部の中村少尉の指揮する先遣小隊として、本部の駐屯地国頭郡本部町渡久地（ちよくじ）地へ向かうべく、那覇港岸壁から第一中隊の大発六隻に分乗して、港を後にした。渡久地は、西海岸北部の港町である。同じ西海岸南部の那覇から、海路渡久地へ向かうことは、一三〇キロといわれる本島の長さを、ほぼ二分した航程になる。この航程を走る大発の速力は、一一ノットであった。しかし、その航海には、途中の仲泊（なかつまり）で碇泊したために、結局二日の日程を要したが、わたしは、